

としょかん

いわて

岩手県立図書館報

2026. 3

No.198

contents

目次

ページ

02

特集 岩手県立図書館の定点撮影事業

09

県内図書館の活動紹介

一関市立大東図書館

11

レファレンスコーナー

・動物供養塚について知りたい。

・『吉田家文書』に記されていた「隕石」について知りたい。

13


児童コーナー わかば通信

まるっと！けんじクイズラリー

14

図書館掲示板

第66回 岩手の読書週間 読書推進標語・手づくり絵本入賞者



特集

岩手県立図書館の 定点撮影事業

岩手県立図書館が実施している取組みのひとつに、特定の場所(定点)を決めて、その場所を一定期間ごとに撮影する「定点撮影事業」があります。当館では、盛岡市内を対象に、昭和 52 年度(1977)から始めました。本特集では、隔年で行っているこの定点撮影事業のあゆみをご紹介します。

定点撮影事業のあゆみ

昭和 52 年度(1977)に始まった岩手県立図書館の定点撮影事業。実施要項には、その目的について「郷土のその時期時代の姿を撮影して社会の変遷を伝えるため、一定の位置を定め、一定の時期に写真撮影を行い、資料の整備保存と活用を図る」と書かれています。

当時の盛岡市は、昭和 57 年(1982)の東北新幹線開通に向けて、盛岡駅周辺の開発や区画整備が進められていた時期でした。盛岡駅自体も現在の 4 代目駅舎へ改築工事中で、事業が開始した昭和 52 年度(1977)の定点写真には、改築工事にあたり建てられた盛岡駅仮駅舎が写り込んでいます。

事業が始まった実際のきっかけは不明ですが、新幹線開通という大きな「社会の変遷」を背景に、移り変わる郷土の風景を記録として残そうという気運が高まったのかもしれません。

定点撮影事業は、昭和 56 年度(1981)までは毎年行われていましたが、以降は、2 年に 1 回の撮影で充分ではないかとして、隔年実施に変更されました。



▲ 開運橋歩道橋(盛岡駅前通)から盛岡駅方面を撮影
盛岡駅の仮駅舎が写っている 昭和 52 年(1977)

事業開始当時の撮影地点は、「盛岡市内の国道 4 号線盛岡バイパス・山田線・東北本線・北上川で囲まれた区域」から、当館所蔵資料に掲載された明治～昭和初期の写真を参考に、「現

在地点と比較できる地点」57地点が選定されています。1地点につき複数の方向を撮影するため、同じ方向を標準レンズと広角レンズの2種類で撮影したものも含めると撮影枚数は200枚を超えました。撮影後は、定点番号・町名・定点名・撮影の方向を記録した定点撮影台帳を作成し、年度ごとに整理しています。

撮影地点の数は固定ではなく、実施要項にも「変貌の激しい地点等については過去の資料の有無にかかわらず、定点の増減をするもの」とあります。実際、盛岡駅の4代目駅舎が完成した昭和56年(1981)には、駅正面を写す地点のほか、やはり同年に架橋完了した旭橋の東口・西口それぞれの交差点が、撮影地点として追加されています。開発が見込まれる地域など、変貌が予想される地域を対象に、撮影地点の追加は随時行われ、特に第三次盛岡市総合計画が始まった平成7年度(1995)は最も多く、14地点が追加されました。

定点地点以外にも、工事中の盛岡駅などの写真も、参考写真として残されています。最近では、現在岩手県立図書館が入居しているいわて県民情報交流センターの建築中の写真や、令和4年(2022)に新しく開業した盛岡バスセンターの建て替え工事の様子も、記録として撮影されました。



▲ 参考として撮影された工事中の盛岡駅
昭和55年(1980)

平成19年(2007)には、それまでの一眼レフカメラ(フィルムカメラ)による撮影から、デジタルカメラへと移行しました。ネガフィルムとプリント写真とで整理していた撮影資料も、以降はJPEG形式でデータ保存しています。これ

により、撮影資料の整理が格段にやりやすくなりました。

昭和52年度(1977)から続けてきた定点撮影事業ですが、今回の令和9年度(2027)をもって開始からちょうど50年目を迎えます。今年度からは体制が変わり、サービス第2課(郷土資料・逐次刊行物・視聴覚資料担当)が担当することになりました。

次からは、実際にどのように事業を実施しているのか、新・旧それぞれの担当者から、裏話もあわせてご紹介します。

旧・担当者

担当者が振り返る定点撮影業務

■ 謎の業務と私

私の場合、撮影作業だけであれば平成19年度(2007)から関わっていました。とは言え、最初はただの撮影要員でしかなく、しかも隔年実施という凡そ慣れとは縁遠い周期の業務です。いかに漠然とシャッターを切っていたか、想像に難くないと思います。

その後、平成29年度(2017)から業務全体を担当するようになりました。その際に最も困ったのが、業務が半ば口伝になっており実施目的が曖昧だった点です。引継ぎ時に手元にあったのは撮影地点リストと地図、これまで撮影してきた写真のみ。手順としては、所定の場所で撮影して地点ごとにまとめる、それだけでした。それでもどうにか初年度の撮影と整理作業を終え、それらをどう活用したものかと過去の定点写真と見比べる中で、徐々に面白さを感じるようになりました。

そんな年度が二度ほど続いたある日、プリント写真を収めた段ボール箱をひっくり返していた際に『定点撮影関係綴 S58~H5/視聴覚資料係』というタイトルの綴りが出てきました。それまでは平成17年度(2005)の綴りが最も古い情報でしたが、それよりもさらに古いこの綴り

には、定点撮影が始まった昭和 52 年度(1977)の実施要項の写し、昭和 56 年度(1981)の要項改正案と改正理由、平成 5 年度(1993)の改正実施要項が含まれていました。折角ですので、この三つの要項を抜粋・比較してみましょう。

	昭和52	昭和56	平成5
実施目的	郷土のその時期時代の姿を撮影して社会の変遷を伝えるため、一定の位置を定め、一定の時期に写真撮影を行い、資料の整備保存と活用を図るものとする。		
撮影範囲	盛岡市内の国道4号線盛岡バイパス・山田線・東北本線・北上川で囲まれた区域とするが、将来は全県へ逐次拡大するものとする。		
撮影位置	当館所蔵の資料に基づき、明治・大正・昭和の写真を複写し、そのなかから現在地と比較できる地点を撮影位置とする。		
	ただし、変貌の激しい地点等については、過去の資料の有無にかかわらず、定点の増減をするものとする。		
画角	35 ミリ一眼レフカメラを使用するものとする。28 ミリ(広角)と50ミリ(標準)の2本のレンズを使用するものとする。	必要に応じて28 ミリ(広角)と50 ミリ(標準)レンズを交互に使用する。	

■ 定点撮影業務の目的

実施要項からは様々なことが分かります。まず業務の「実施目的」ですが、整備、活用という文言からして、図書館資料として利用に供すべく撮影されていたことがうかがえます。業務として実施しているのだから当然そうだろう……と思われるでしょうが、知る限りでは撮影した写真は館内展示でのみ利用され、それが図書館資料として利用に供された時期はありません。写真の中には車両番号や個人の顔が写り込むことがありますから、もしかしたらそれ

を理由に一般公開に難を感じるようになり、そのうちに当初の目的が薄れ展示するだけになっていった、ということなのかもしれません。

「撮影範囲」には、ずっと疑問だった定点の分布に関するヒントがありました。盛岡市ホームページに、少し小さいですが航空写真と城下町を重ね合わせた写真があります。これと見比べてみると、この4つの要素で囲まれるエリアが城下町をすっぽり収める範囲であること、また、定点である「盛岡グランドホテル」と「岩山頂上」が、建物が高くなったので見通しが悪くなってはいるものの、城下町全体を見下ろせる地点だということが分かります。この後の「撮影位置」で明治や大正という言葉が出てくるのも、旧城下町であれば実際に古い写真が残っているから、ということなのかもしれません。あるいは撮影位置、つまり古い写真の方が先に選出され、それらを集めた結果として撮影範囲が定まった可能性も考えられます。

「画角」からは、写真の中にズームの使用／不使用が混在する理由が分かりました(※広角／標準の切り替えを機構的に再現するのがズーム機能)。定点撮影が始まった昭和 52 年度(1977)当初は確かに「広角」「標準」と二種類のネガファイルがつけられており、その丁寧な仕事ぶりに驚かされます。しかし、昭和 56 年度(1981)の改正で早々に「必要に応じて」の文言が追加され、以降は広角／標準を切り替えての二回撮影が無くなり、より広い範囲を写し込める広角レンズがメインで使用されるようになります。業務に携われる人員が減ったか、業務負荷が高過ぎたのでやり方を変えたということなのだろうと思います。

最後に「撮影位置」ですが、ここが最も面白い部分です。定点撮影を始めるにあたり基準とした写真があること、その写真は当館蔵書に掲載されていること、そしてもちろん写真の風景と現在地とが突合できていたこと、この3つが分かります。では、基準となった写真は、一体どの本に載っているどの写真なのでしょう？ ——残念ながら、今のところはっきりとは分かりません。ただ、以前勤めておられた村

松副総括から「盛岡市立図書館が過去に編さんした写真集(『盛岡写真帳』)が元になっているのでは?」と教えていただいたことがあり、私もその線が強いのではないかと考えています。雑多な写真が収まった箱から定点撮影と関連しそうな古い風景写真の写しも幾つか出てきていますので、それらも含めてきちんと調べて行けば、元になった本や写真を特定できると思います。

また、同じく撮影位置について、初期段階で定点の増減が見込まれていたことが分かります。古い綴りには定点追加の理由も記載されていたので、今後、定点を廃止・追加する際の判断がしやすくなりました。ちなみに、新たな定点が多数追加された平成7年度(1995)の文書を見てみると、道路の拡張整備、再開発見込、既存施設の移転計画を理由としたものが多く、それらの地点の幾つかは後に景色が大きく変わっています。

■ 担当者目線での面白さ

1. 大人の街探検

定点は道中に点在しているうえに辻々に設定されているため、私の場合は大半を徒歩で移動していました。試しに歩数計で計ったところ約2万歩あるいた日もあり、その日は午前十時頃に出発して午後四時頃に帰着していたと思います。移動距離こそ長いのですが、道々見かけるユニークな看板や商店のお品書き、ビル同士の隙間に飲食店が所狭しと軒を並べる不思議な一画、野良猫や路地裏の落書きなど、色々なものが目に入ってくるので歩いていて飽きません。

ちなみに、ある年度に担当された方は警察署に「道路使用許可申請書」を提出しており、路上駐車の特許をとった上で定点撮影を行っていたようです。どのような方法で定点を巡るか、担当者ごと個性が感じられます。

2. 天気まかせ

晴れた日はキリッとした写真が撮れて良い

のですが、南や西向きの撮影ではゴーストやフレアが発生しやすいため、その場で日が翳る瞬間を待ったり、他の定点を先に回ったりします。曇りの日はそうした心配は無いのですが、全体的にコントラストが下がりぼんやりとした印象の写真になってしまうのが難点です。雨の日はレンズに雨滴が付いて被写体が滲むので、そもそも撮影に不向きです。万事天気まかせで思うように捗らないのですが、その分、綺麗に撮れた時は嬉しく感じるものです。

ちなみに、盛岡グランドホテルや県庁屋上は事前の日程調整と許可申請が必要なため再撮影は是非とも避けたく、ある年、風雨が激しい日に撮影を強行したことがあります。結果、予想通り手こずった挙句、同行者に風邪をひかせてしまいました……その節はご迷惑をおかけいたしました。

3. 不定な定点

業務を引継いだ年、展示用にと昭和52年度(1977)撮影時のネガフィルムをスキャンし、その年の定点写真との突合を行いました。すると、撮影位置が100mほど南にずれている地点があることが分かりました。基準となっていた建物が取り壊されたことで撮影場所が曖昧になり、立ち位置のちょっとした誤差が累積した結果なのだと思います。

このほか、年度によっては水平がとれていなかったり見上げるような画角になっていたりする写真があります。急いで撮ったのかなとか、建物の方に注意を持っていかけたのかなとか、当時の担当者の動きが写真の向こうに透けて見えるようで面白いです。

4. ある日常

古い定点写真を整理していると、時代時代の服装や髪型、モノのデザインに目が留まります。車両のデザインなどはその最たるものですが、たまたま写り込んだ広告の書体などにも時代性が感じられ面白いです。最近の写真でも少し見方を変え、例えばコロナ禍前後の写真を見比べ、写り込んだマスクの数や道路脇のゴミの様

子を調べてみると面白いかもしれません。

ちなみに、過去の写真の中には早朝（午前5時！）に撮影されたものがあります。人や車が写り込まないようにするためなのだと思いますが、目覚める前の街並みには独特の雰囲気、漂い、哀愁すら感じられます。

5. 担当者のメモ

昭和 58 年度(1983)の実施伺い文書の中に、色あせた A4 二つ折りの感熱紙が挟まっています。タイトルは「定点撮影地点選定案」。職員の個人的なメモだと思われそうですが、表現が一々趣深く、「1 国道交差点（人生にも通じた別れ道を基準に撮影）」「2 橋（橋には昔からロマンが満ちあふれている。会う時も別れる時も……）」という具合です。どのような状況でこの案が練られたのか分かりませんが、例えば2に北上川、中津川、雫石川の3水系に架かる橋名がずらっと並んでいるところなどを見ると、過去の担当者も割と遊び心を持って業務に携わっていたのではないかなと感じます。（どなたのメモか分かりませんが、こっそり隠していたのでしたらすみません……）

■改めて定点撮影とは

「定点撮影を始めよう！」と考えた当時の職員は、実施要項にあるとおり「社会の変遷」を残したかったのだと思います。そしてその背景には、世の中が急激かつ不可逆に変化しているという実感、また、大方の人がその渦中であって変わり続ける今を追うので手一杯だった、という事情があったのではないかとも思います。もう 15 年も前になってしまいましたが、東日本大震災津波後の世の中を見て、似たような思いを抱いた方もいたのではないのでしょうか。

当たり前のことですが、自分が見ている「今」は、瞬きの後にはもう記憶の中にしか存在しなくなります。そして、時が経つにつれぼんやりとしか思い出せなくなり、やがては記憶がある

こと自体も意識から消え去ります。ところが、それは思い出せないだけで忘れていないものでもあるらしく、ちょっとしたきっかけで不意に意識に上がることがあります。定点写真は、その年・その場所を知る人にとっては記憶の断片を引き出す呼び水のようなものであり、また、その年・その場所を知らない人にとっては過去を映す水鏡のようなものなのだろうと思います。

■始めよう、定点撮影

定点撮影を始めるのは簡単です。基準となる昔の写真を選び、現在のどこにあたるのかを特定し、その場所を一定の期間をおいて撮影する。それだけです。古い写真がなくとも、都市計画図を眺めながら地点を決め、これからの変化を追いかけていくのも良いでしょう。

撮り溜めた写真の整理が大変、という懸念があるかもしれません。写真は年ごと・場所ごとに整理される必要がありますが、デジタルカメラで撮影するのであれば、地点番号-撮影方向-撮影年度のようにネーミングを少し工夫することで思いのほか簡単に整理できます。また、写り込む個人情報に気になるかもしれません。画角や時間帯を調整して極力人を写し込まない、ぼかしなどマスキングを施したバージョンをつくるといった対応が考えられます。わざわざ撮影する意義を感じられないのであれば、この写真を見るのが 30 年後の誰かだと考えてみてはどうでしょうか。「見慣れた」「ありふれた」と感じるのは今の自分であって、30 年後の誰かは、きっとそうは感じないはずですよ。

今はデジタルカメラの性能も良いですので、撮影に特別な知識や技術を求められることはありません。業務でもプライベートでも、まずは身近な風景にカメラを向け、シャッターを切ってみてはいかがでしょうか。

（岩手県立図書館 安保 和徳）

令和7年度の定点撮影を ふりかえって

令和7年度(2025)から、サービス第2課(郷土資料・逐次刊行物・視聴覚資料担当)の5名が定点撮影を担当しました。初めての定点撮影の様子をふりかえります。

■ 天候とクマと再撮影

撮影作業を開始した9月は、まだ厳しい残暑が続いていました。雨天、台風などによる延期や、晴れていても逆光で撮影を断念することもあり、当初の計画通りには進みませんでした。撮り直しも含め、全ての撮影を終えたのは12月上旬でした。

また、去年は市街地でもクマの出没が相次いでいました。数時間前に訪れた場所のすぐ近くで、クマが目撃されたというニュースにヒヤリとした経験は、一度や二度ではありません。

撮影担当者は、天気予報だけでなく、クマの出没情報にも細心の注意を払いながら、徒歩・バス・カーシェアリングのいずれかの手段で市内92地点を効率よく回るための行動計画を立てていました。この入念な「準備」を経て、週に数時間程のペースで撮影を行っていきま

した。やがて、撮影も残すところあと数地点となり、次に各地点ごとに撮影した数枚の写真の中から、1枚を選定する作業を開始しました。

人通りの多い場所や、交差点等の地点では、行き交う人や車が写り込みます。しかも、わずかな時間差でその風景は変化することから、選定担当者には、どの写真を選ぶかを見極めるための「視点」と「決断力」が必要です。

ところが、ここで大きな問題が発生します。選定担当者から、画角の微妙なズレや、光の反射などによって、不採用の写真が多く見られることを指摘されたのです。「定点撮影」は、同じ場所、同じアングルで撮影する取り組みです。可能な限り、過年度の写真と同じ画角になるよ

うに細部までこだわって撮影しなければなりません。結果的に、例年より多くの撮り直し作業が発生し、今後に活かす反省点となりました。

その後、再撮影と選定を終え、撮影地点数92地点、総撮影枚数264枚の、令和7年度(2025)定点撮影の報告書は、撮影開始から3ヶ月半をかけて、ようやく完成しました。

担当者所感より

- 晴れた日に出かけることが多かったが、ハレーションを起こすことがあったので、曇りの日が一番撮りやすく感じた。県庁やホテルの屋上など、普段入ることのできない場所での撮影は貴重な機会だった。
- 過年度の写真と地図を見ていると、道に迷った人と間違えられることが何度かあった。
また、クマに関する注意喚起や対策が目につき、「クマに気をつけて」と声をかけられることも多かった。
- 写真を選ぶのは大変な作業だったが、郷土の歴史の一端に触れることができた。建物ひとつで景観が変わるのを目の当たりにすると、形にして後世に残すことの重要性をひしひしと感じた。
- 過年度の写真とのズレの許容範囲に悩みながら選定した。街並みの移り変わりを伝える郷土資料のひとつとして、継承していくことを考えさせられた。約半世紀続けてきた事業を広く知ってもらい、活用いただくために、他館のようにデジタルアーカイブとしても公開できればよいと思う。

■ 定点写真とデジタルアーカイブ

本事業は、撮影した成果物を活用した展示の実施をもって完了します。テーマを決め、今年

度と他の年代の写真を選び、展示を行います。過去には、新しく開業した盛岡バスセンター界限や、平成元年(1989)と令和元年(2019)を比較した展示等が行われました。



▲過去の定点写真展の様子

今年度は別の場所で、「定点撮影写真展〜なつかしい盛岡の風景〜」を3期に分けて行っており、移り変わりの大きい地点は既に展示されていたため、写真の選定作業は難航しました。

悩んだ末、令和8年(2026)5月に県立図書館が移転開館から20年を迎えることから、PRも兼ねて、いわて県民情報交流センター建設中の様子と、20年前の定点写真を併せて展示することにしました。基礎工事の段階から写真を撮っていた当時の職員には、本当に感謝しています。

また、さまざまな年代の定点写真アルバムを開いていく中で、街の移り変わりについて、「この場所は、こうなっていたのか」という驚きと発見もあれば、懐かしく感じられる風景もあり、約50年にわたって取り組んできた事業の重みを感じました。

同時に、これらをデジタルアーカイブで体系的に整理して公開することができれば、利活用の可能性はさらに広がるのではないかと思います。

近年、図書館や博物館のデジタルアーカイブは、急速に普及しています。定点写真をデジタルアーカイブで公開している図書館は、浦安市立図書館、小平市立図書館、台東区立図書館、神戸大学附属図書館などがあります。浦安市立図書館は、長年市民ボランティアの協力を得て、市内100地点の撮影に取り組んでいます。

また、鳥取県では、昭和43年(1968)から5年おきに県内同一地点の写真撮影を行う事業で、県内各市町村教育委員会が地上写真、県立博物館が航空写真の撮影を分担して行っています。撮影した写真は、鳥取県立図書館・鳥取県立博物館・鳥取県立公文書館・鳥取県埋蔵文化財センターの4館共同で運営する「とっとりデジタルコレクション」で公開しています。全県的に約50年にわたって行っているところは他に例がなく、ユニークな取り組みです。

これらのデジタルアーカイブでは、現在の地図から地点を選択し、ある地点の写真を年代ごとに一覧で表示することも容易に可能です。この機能があれば、効率よくさまざまな年代の写真を選ぶことができることはもちろん、いつでも手軽に閲覧できることから、デジタルアーカイブ実現への思いは、より深まりました。

これまで、定点撮影には、“図書館の知られざる業務”というイメージがありました。しかし、実際に定点撮影を経験したことで、図書館が長年にわたり手掛けてきた郷土資料として、より多くの人に関心を持っていただけるよう、時代に応じたサービスを展開していきたいと思いました。

(岩手県立図書館 岩持 河奈子)

県内図書館の活動紹介

県内各地の図書館から特徴と活動をご紹介します

一関市立大東図書館

所在地：〒029-0523 岩手県一関市大東町摺沢字新右エ門土手 12-2

TEL: 0191-75-3541 FAX: 0191-75-2921 Email: daitosho@city.ichinoseki.iwate.jp

現館建築年月：昭和 56 年 7 月 (平成 22 年 2 月増改築) 延べ床面積：1,285 ㎡



図書の蔵書冊数： 158,756 冊 (令和 7 年 4 月 1 日現在)

年間来館者数： 23,327 人 (令和 6 年度)

年間登録者数： 6,181 人 (令和 6 年度)

開館時間	平日：午前 10 時 00 分 ～ 午後 7 時 00 分 土日祝日：午前 10 時 00 分 ～ 午後 6 時 00 分			
休館日	・月曜日 (祝日の場合は翌平日) ・資料整理日 (第 4 木曜日、ただし祝日の場合は開館) ・年末年始 (12 月 29 日～1 月 3 日) ・蔵書整理期間			
登録範囲	・居住地、勤務地等による制限なし			
貸出点数・期間		点数(点)	期間(日)	延長
	図書・雑誌	期間内に利用できる点数	21	可
	C D	期間内に利用できる点数	21	可
	ビデオ・DVD	5 (各館につき)	21	可

一関市立大東図書館の特徴と活動

はじめに

一関市立大東図書館は、市内の8図書館の中で最も長い歴史を持ち、その前身は大正2年(1913)開設の私立大原図書館(のちに大原町へ移管し、町立大原図書館となる)、大正13年(1924)開設の興田村立図書館まで遡ります。昭和56年(1981)に現住所地に図書館が建設され、旧東磐井郡下第1号の独立図書館として大東町立図書館が開設。その後、平成17年(2005)の市町村合併により現在の名称となり、平成22年(2010)には増改築工事が行われ、現在に至っています。

開設当初から地域の生涯学習施設の中核として、様々なイベントや企画展示の実施、広大な地域に本を届けるため移動図書館車を活用した館外サービスの実施に力を入れています。

運営について

一関市内の8図書館は全て直営で、大東図書館は館長を含め8人体制で運営しています。

町立図書館時代から続く行事のほか、この地域ならではの企画やイベントなども館員一丸となって知恵を出し合い、企画・運営に当たっています。

また、同町内にある芦東山記念館や一関市民俗資料館と企画展示での連携や調査資料の提供など、文化施設間で相互協力を図っています。



▲令和7年(2025)7月に実施した「第43回お父さんお母さん子どもの本をもっと読もう研修会」の様子

館外サービスについて

当館は町立図書館時代から館外サービスに力を入れており、特に移動図書館車「なぎさ号」を活用した出張貸出は長年地域の方々に親しまれています。

令和7年(2025)3月に20年間走り続けた3代目なぎさ号が引退し、同年6月には待望の4代目なぎさ号による運行を始めました。4代目車両のラッピングイラストは、県立大東高等学校の美術部員の皆さんに制作いただきました。温かみのある緑色のバックカラーに可愛らしいイラストが映え、訪問先の小・中学校やこ

ども園・保育園では「絵が可愛い」「車がピカピカで嬉しい」といった喜びの声が上がっています。

なぎさ号による貸出は、「移動図書館サービス全域化計画」に基づき、大東町内のみならず、令和6年度(2024)から隣の千厩地域へも運行を開始し、令和8年度(2026)には室根地域への運行も開始します。今後も利用者のニーズに合わせた資料を準備し、図書館への来館が困難な方々へ読書の機会を提供していきたいと考えています。



▲令和7年(2025)6月から運行を開始した4代目なぎさ号

地域に根差した企画の実施

大東図書館には、正面玄関を通り左手に進むと広々とした展示用スペースがあります。このスペースを活用し、隔月で内容を入れ替えながら「特別企画展」を実施しています。展示のテーマは市民に今伝えたいものとし、特に地域の方々や大東町の産業や祭りなどの特色にスポットを当て、これまでには「大原水かけ祭り」や「摺沢水晶あんどん祭り」といった歴史ある祭りとのタイアップも行っています。今年度は大船渡線開業100周年事業の機運醸成を目的とし、「ドラゴンレールに交わるひと・もの・まちの軌跡」と題し、大船渡線建設に尽力した町内出身の実業家を紹介するパネルの展示や、市観光協会と連携し、記念グッズ等の展示も併せて行い、多くの方々にご来館いただきました。

今後について

令和8年度(2026)は、新たな一関市立図書館振興計画による活動初年度となります。また、町内では県立大東高等学校が創立100周年を迎え、昨年オープンした道の駅だいが1周年を迎えます。

振興計画の「いつでも、どこでも、だれでも、知り、学び、楽しめる図書館～市民とともに成長する図書館～」の理念に基づき、関係機関と連携を図り、市民に親しまれる企画を実施し、地域と繋がる図書館として活動していきたいと考えています。

(一関市立大東図書館 担当：加藤)

レファレンスコーナー

県立図書館に寄せられたレファレンスの事例を紹介します。

Q.

動物供養塚について知りたい。なぜ建てるのか説明した資料と、実際の塚の事例、特にクマのものがあるか。

【キーワード】

供養、供養塚（碑・塔）、記念碑、熊

【調査プロセス】

1. 関連しそうな事典で動物供養に関する項目の調査
2. 動物供養について資料を調査
3. クマの供養塚について調査



【回答】

まずは事典で「動物供養」の項目を確認。『日本大百科全書』には“人間生活と密接な関係をもつ動物の死を弔い、供養する儀礼。”とあり、『民俗小事典死と葬送』では“動物を捕獲・食用・使役するなどの者が、供養塔や墓碑・塚を作って慰霊すること。人間と同様に動物にも靈魂が存在するという考えに基づく。”とありました。

『いきものをとむらう歴史』によると、こうした動物供養の考え方の背景には、動物にも魂が宿るといふ仏教思想があり、そのほとんどにはなんらかの宗教的影響がみられ、動物を財産や利用する存在としてみる欧米では考えられないことだということ。供養は動物のためだけではなく動物を殺した人の救いのためにも行われるとあります。

一方、塚は建てませんが、クマを捕獲した際その再生を祈り、祟らないようにするという仏教以前ともいふべき、供養目的の送り儀礼が北方にはあるということが『生きもの民俗誌』で挙げられています。その地域性については『人と動物の日本史 4』に“アイヌや沖縄には「供養の文化」があり、列島中央部には「供養の文化」がある、という単純な図式ではないことがわかる。列島中央部にも、北の送り儀礼に通じた儀礼が沿岸部に広く見られる。ところが、食べないウミガメ供養は東北に多く、食べた動物の供養塔は九州に多いなど、列島中央部の「供養の文化」にも地域差が認められるのである。”とあり、簡単に区切れるものではないようです。

さて、では供養碑はどんなところにあるのか、前述した『いきものをとむらう歴史』に全国の供養塚の動物別の解説があり、2007～2017年調査一覧には、宮崎県の「熊塚」、山形県の「千足供養塔」などが掲載されています。また、同著者の『どうぶつのお墓をなぜつくるか』の2006年以前調査の一覧も紹介し、調査終了となりました。「すし塚」や「しろあり供養塔」など、クマ以外にも様々な動物の興味深い塚があり、脱線しそうな調査でした。

昨年なにかと世間を騒がせた「クマ」に関連した事例をご紹介しました。2016年に起きた十和利山熊襲撃事件の際に三毛別熊事件の事も知り、クマは完全に私の恐怖対象。遠目に見ている分には可愛いかもしれませんが、身近には感じたくない…。一定の距離を保ちつつ共存できるよう願います。

【主な参考資料】 ※()内は当館請求記号

- ・『日本大百科全書 16』小学館 1987.7 (R031/- 10/1-16)
- ・『民俗小事典死と葬送』新谷 尚紀//編 関沢 まゆみ//編 吉川弘文館 2005.12 (R358.6/ミン)
- ・『いきものをとむらう歴史』依田 賢太郎//著 社会評論社 2018.7 (387/ヨダ)
- ・『生きもの民俗誌』野本 寛一//著 昭和堂 2019.7 (382.1//E)
- ・『人と動物の日本史 4』吉川弘文館 2009.4 (210.04/ト/4)
- ・『どうぶつのお墓をなぜつくるか』依田 賢太郎//著 社会評論社 2007.7 (645/ヨダ)

Q.

『吉田家文書』に記されていた「隕石」について知りたい。

【キーワード】隕石

【調査プロセス】

1. 隕石や陸前高田市に関する資料を調査
2. 「気仙隕石」をキーワードに国立国会図書館デジタルコレクションや雑誌を調査
3. 『岩手日報電子縮刷版』等を調査



【回答】

『吉田家文書』は、仙台藩の大肝入を世襲していた吉田家に伝わる文書で、仙台藩から気仙地方の統治を任じられた地方役人の執務記録です。平成23年（2011）に発生した東日本大震災の津波により、文書は被災しましたが、岩手県立博物館や国立国会図書館で修復を行った結果、平成26年（2014）に修復作業が終了しました。『吉田家文書』には、嘉永3年（1850）5月4日、陸奥国気仙郡長部村（現陸前高田市気仙町）丑沢の長円寺境内に「隕石」が落下した当時の状況が記されています。

隕石落下時の状況について、『気仙天隕石物語』によると、当時は恐ろしい物体が降ってきたと、人々は関心を持ったようです。『陸中海岸の石伝 続』には、隕石を持っていると、漁業がうまくいき、難病が治ると信じられていたため、人々が欠いて砕き、持ち帰っていたことが記されています。

その後、隕石や陸前高田市に関する資料を調査していくと、この隕石は「気仙隕石」と呼ばれていることが分かりました。明治23年（1890）の『岩手学事彙報 179号』に掲載された郷土史家・新渡戸仙岳の報告短報「気仙鉱物略誌」がきっかけとなり、「気仙隕石」は学者たちの注目を集めます。明治27年（1894）の『地学雑誌 第6集 第68号』には、隕石の石質は、カンラン石および古銅石よりなるもので、コンドライト属であると科学的に解明されました。

同年8月、「気仙隕石」は、帝室博物館（現東京国立博物館）へ献納されています。この時の重さは約135kgで、日本最大の石質隕石と称されました。さらに研究用で削られ、気仙隕石の総重量は約106kgになり、現在国立科学博物館に展示されています。

陸前高田市には、今でも「天隕石降落之碑」が残っているそうです。『岩手日報電子縮刷版』で調査したところ、昭和51年（1976）に長円寺の住職らによって、何か記念になるものを残したいとの思いから、隕石落下地点に建立されたものでした。

今回、様々な年代の資料を調査したことで、気仙隕石について色々な角度から情報を得ることができ、非常に興味深い事例でした。郷土資料を活用することで、どの時代の出来事でも当時の歴史を知るきっかけにもなるため、改めてレファレンスの面白さを感じました。

【主な参考資料】

- ・『気仙天隕石物語 日本最大の隕石と長円寺』
西田 耕三／編 宮城 隆興／監修〔N S K 地方出版〕1979.6（K 459 /-1 /1）
- ・『陸中海岸の石伝 続』熊谷印刷出版部 1986.1（K 387 /-1 /2-2）
- ・新渡戸仙岳「気仙鉱物略誌」『岩手学事彙報 第179号』九阜堂 1890.2（KS37 /4 1）
- ・脇水鉄五郎・近藤会次郎「日本天隕石概説（其一）」『地学雑誌 第6集 第68巻』
東京地学協会 1894.7（S450 /7 1）
- ・『官報 1895年5月14日 第3559号』大蔵省印刷局〔編〕1895
- ・『岩手日報』1976（昭和51）年8月14日 夕刊4面
- ・『吉田家文書』（マイクロフィルム）



県立図書館児童コーナーの活動をご紹介します。



まるっと! けんじクイズラリー



宮沢賢治作品を読んで答えるクイズラリーを開催しました。難易度は「かんたん」「すこしむずかしい」「むずかしい」の3種類。賢治作品に関心を持つきっかけになるようなイベントをと思い企画しました。

あそびかた

- 1 挑戦したい難易度の問題用紙を選ぶ。
難易度別に色分けをしてわかりやすくしました。
- 2 賢治作品を読んでクイズの答えを探す。
- 3 全3問を解いて①～③に当てはまる文字を入れ、言葉を完成させる。
- 4 言葉が完成したらカウンターで答え合わせ。正解したら菓をプレゼント。

〈すこしむずかしい〉

まるっと!
けんじクイズラリー
すこしむずかしい

Q1 1924年に賢治が自分のおかねで出した読書の名前は『○○しゅら』です。○○に入る言葉は何でしょう?

Q2 『注文の多い料理店』に出てくる2匹の犬は何の動物に似ていますか?

Q3 『せろ弾きのゴーシュ』で3番目に登場する動物は何でしょう?

もんだいは全部で3問! すべてわかったら①～③に当てはまる文字を並べて、わたしにかんげいする言葉を完成させてください!

答え

① な ② ③

〈かんたん〉

まるっと!
けんじクイズラリー
かんたん

Q1 賢治の『おおかみ三兄弟』に登場する動物は何でしょう?

Q2 『おおかみ三兄弟』に出てくる動物は何でしょう?

Q3 『おおかみ三兄弟』に出てくる動物は何でしょう?

答え

て

〈むずかしい〉

まるっと!
けんじクイズラリー
むずかしい

Q1 賢治の『おおかみ三兄弟』に登場する動物は何でしょう?

Q2 『おおかみ三兄弟』に出てくる動物は何でしょう?

Q3 『おおかみ三兄弟』に出てくる動物は何でしょう?

答え

シ オ



クイズの答えはどこにあるかな?

クイズの答えを探しながら賢治作品を楽しく学ぶことができます。



期間中は絵本を読んでクイズに答えられるように関連展示も一緒に行いました。



おめでとうございます!
菓をどうぞ!

全問正解!



図書館揭示板

県立図書館からの連絡や告知をお届けします

第66回 岩手の読書週間 読書推進標語・手づくり絵本入賞者

岩手の読書週間は、2月1日～14日までの“春を待つ、雪解け前の静けさの中で、本に親しもう”というスローガンのもと、岩手県独自の読書週間として昭和35年に設定されました。この期間中は読書週間を全県的に展開し、読書普及活動を行なっています。

読書週間期間中の主催行事として、令和7年度「岩手県読書をすすめるつどい」が2月7日(土)にアイーナで開催され、読書推進標語と手づくり絵本の入賞者の表彰が行われました。

手づくり絵本の応募作品は、1月31日(土)～2月8日(日)まで岩手県立図書館で開催した「第46回手づくり絵本展」で展示した後、一部作品を除き県内の図書館等で巡回展示が行われています。

1 読書推進標語入賞者

最優秀賞

『本の世界 泣ける！ 笑える！ 次は何？』

勝山 空 (岩手県立盛岡視覚支援学校 高等部1年生)

優秀賞

『スマホより ページをめくる 指がすき』

佐々木 基樹 (岩手県立盛岡視覚支援学校 専攻科2年生)

『一文字 一文 一ページ 読むほど増える コトバの貯金』

青山 昊太郎 (二戸市立石切所小学校3年生)

奨励賞

『読書って ところにしみる ごちそうだ』

高橋 穂夢 (奥州市立前沢小学校3年生)

『読み終わるたびに 私は、強くなる』

佐々木 彪牙 (奥州市立水沢中学校3年生)

『「これにしよ。」 気になる絵本 わくわくだ』

佐藤 礼美 (奥州市立羽田小学校3年生)

『ほんよんで しらないせかい みてみよう』

坂上 翔亮 (奥州市立前沢小学校1年生)

『図書室の 本の匂いに さそわれて』

鈴木 ゆな (奥州市立前沢小学校3年生)

<子どもの部>

最優秀賞

『あしたもなかよし』

青木 風花、佐々木 凜
(奥州市立水沢中学校1年生)

優秀賞

『そらとなかよし』

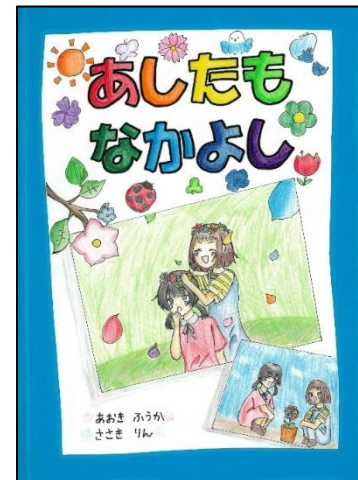
折元 生咲(葛巻町立葛巻小学校1年生)

『たいようがくれた夏のおもいで』

谷山 翔人(葛巻町立江刈小学校2年生)

『おばけとはなかんむり』

渡邊 心春(雫石町立雫石中学校3年生)



<一般の部>

最優秀賞

『権太と六助』

小松原 健(花巻市)

優秀賞

『なんぶてつびんアラレちゃんとりんごのアカネちゃん』

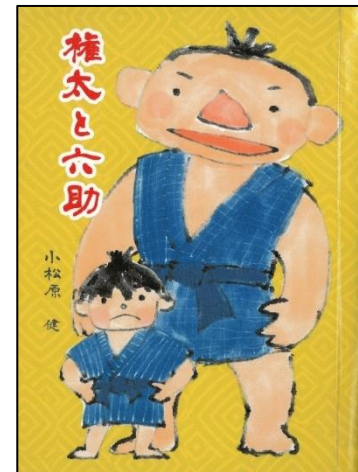
永田 望美(盛岡市)

『みんなにつたえたい むかしあそびうた』

柴田 幸榮(葛巻町)

『小さな夏』

小山 栄子(一関市)



<わかばの部>

最優秀賞

『あやのすきなものしりとり』

國分 彩矢・國分 佳奈(二戸市)

優秀賞

『いろのいちにち』

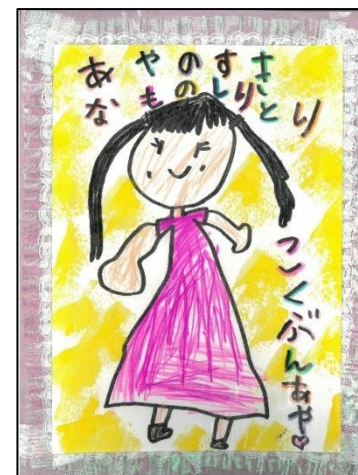
櫻井 琥夏・櫻井 清良(二戸市)

『やまのうんち』

村木 花妃・村木 としえ(葛巻町)

『げんきいっぱいげんきくん』

谷山 元希・谷山 実沙(葛巻町)



岩手県立図書館報

としょかん いわて

No.198

発行日 令和8年3月24日

編集・発行 岩手県立図書館